

絵本の読み聞かせにおける一考察

—感情の有無からくる影響—

秀 真一郎

One Consideration about Picture-book storytelling
—The influence by emotional and non-emotional storytelling—

Shinichiro HIDE

Abstract

This paper is aim to consider about Picture-book storytelling. Picture-book storytelling is the most popular activity in early childhood education and childcare classes. It is well-known, unfortunately, that early childhood educators and childcare workers work for only “playing” with kids. However, we strongly reconsider that “playing” is very important for children’s development, and children study with “playing”. In other words, it is very important how much we logically recognize the relation between children’s development and playing. This paper focuses on the Picture-book storytelling with the influences by emotional and non-emotional storytelling. It is definitely existed the differences between the emotional and non-emotional storytelling. Therefore, it is considered the influence to children from these differences.

Key words : Picture-book, Storytelling, Acting
キーワード : 絵本, 読み聞かせ, 演じ分け

1. はじめに

現在, 幼児教育・保育の抱える課題は様々であり, 待機児童問題が大きな課題としてあげられる。待機児童問題では, 単に受け入れをする保育所の不足というように捉えられている面もあるが, より深刻な問題として“保育者不足”が存在する。各年齢帯に

おける子どもの数に対する保育者の必要人数が定められているだけに, より多くの子ども達へ健全な保育を提供するためには, 保育者の人数は重要な考慮すべきポイントとなる。

しかし, 保育者が必要であるからといって, 保育者の質を度外視することはできない。保育所保育指針にもあるように, 「生命の保持」と「情緒の安定」

があってこそ、子ども達の健やかな成長が確保され、より自発的な学びへとつながっていく。中には、「保育者とは誰にでもできる仕事」というような発言がなされ、子育てを経験した人であれば、誰にでもできる仕事という認識を持っている人もいるようである。この点に関しては、保育士資格を国家資格として全ての人が認識し、資格保有者はその意識の下、より高度な知識や技能を身につけていく、さらなる資質向上に努めていかなければならない。

保育者の仕事とはただ単に子どもと“遊ぶ”という認識がもたれているが、この“遊ぶ”こそが子ども達にとっての学びの場だという認識をさらに強めていかなければならない。そこには保育者として子ども達と関わるあらゆる時間と、そこに存在する様々な内容に対して、どれほど高い学問的視点を持ち合わせることができかが重要となる。言い換えれば、子ども達の成長と遊びをいかに論理的に捉えることができるということである。

ここでは、日常の保育において活用場面が多く存在する「絵本」に焦点を当て、さらにその絵本の「読み聞かせ」に対して論理的視点を当てることとする。さらにその視点を、読み聞かせ時に存在する「大げさな演じ分け」と「演じ分けない統制」に分類し、その二つの方法に存在する違いと、違いから生じる子ども達への影響について考えていくこととする。

2. 幼児教育・保育における絵本の位置付け

平成29年3月に、幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂された。この度の改訂で最も注目すべき点は、3歳以上児における保育に関するねらい及び内容において、共通化が行われた点と考える。もちろん、その詳細における表記や、内容に対する捉え方には賛否両論があり、これが全てを網羅するとは言えない。しかし、長きに渡って唱えられて来た“幼保一元化”

の一步としては、評価されるのではないかと考える。

絵本の読み聞かせが幼児教育・保育現場において大切な内容として捉えていることから、より詳しく見ていくこととする。その点において、今回改訂され共通化がなされた幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領において、新たに加わった「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「3歳以上児の保育に関するねらい及び内容」から、絵本や絵本の読み聞かせに関する言及に着目する。なお、ここでは保育所保育指針による記述方法を基に進めることとする。

幼児教育を行う施設として共有すべき事項

(2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

ク 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

ケ 言葉による伝え合い

保育士等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身につけ、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

3歳以上児の保育に関するねらい及び内容

(1) 基本的事項

ア この時期においては、運動機能の発達により、基本的な動作がひと通りできるようになるとともに、基本的な生活習慣もほぼ自立できるようになる。理解する語彙数が急激に増加し、知的興味や関心も高まってくる。仲間と遊び、仲間の中の一人という自覚が生じ、集団的な遊びや協同的な活動も見られるようになる。これらの発達の特徴を踏まえて、この時期の保育におい

ては、この成長と集団としての活動の充実が図られるようにしなければならない。

(2) ねらい及び内容

ウ 環境

(ア) ねらい

- ③ 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、者の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

(イ) 内容

- ⑩ 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。

(ウ) 内容の取り扱い

- ⑤ 数量や文字などに関しては、日常生活の中で子ども自身の必要間に基づく体験を大切に、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。

エ 言葉

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

(ア) ねらい

- ② 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- ③ 日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。

(イ) 内容

- ① 保育士等や友達言葉や話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり、話したりする。
- ④ 人の話を注意して聞き、相手にわかるように話す。
- ⑦ 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- ⑧ 色々な体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- ⑨ 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、

想像をする楽しさを味わう。

(ウ) 内容の取り扱い

- ③ 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、
楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。
- ④ 子どもが生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、
絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。
- ⑤ 子どもが日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。

以上のように、絵本や読み聞かせに関する言及は、五領域の「言葉」のみならず、様々な部分においてその内容の重要性に言及が及んでいることがわかる。中でも、文字・言葉・感覚・興味・関心・豊かという言葉によって表現されている内容が、絵本や読み聞かせに密接な関係があることが予想される。さらには、これだけ多くの言及がなされていることから、絵本の読み聞かせに対する高い重要度の認識がうかがえる。また、先ほどあげたキーワードに見られるように、言葉とのふれあいや言葉への親しみへの大切さへは高い認識が見られるが、決して言葉・文字学習としての活用が想像される表現は一切されていないことも注目すべき点だと言える。

3. 保育現場での絵本の活用状況

1) 1日に何度も存在する絵本の活用場面

2章において、幼児教育・保育における絵本の位

置付けを述べてきたが、現在の保育現場では絵本はなくてはならない大切な教材として位置付けられている。そのような位置付けにあるからこそ、保育における絵本の活用場面は非常に多いと言える。その活用場面に対する様々な意見については、賛否両論と言えるものであるが、ここでは実際に活用されている状況について見ていく。

(1) 主活動の導入

保育現場において、午前中の1時間程度をその日のメインの時間と捉え、保育者による子ども理解によって作成された指導案の下、主活動が行われる。主活動の内容は様々で、経験を基にした絵画作品制作、音楽を中心とした表現活動、体を動かす体育遊びといった、子ども達の成長発達に欠かせない内容を行っている。

主活動をより充実したものにするためには、子ども達自身が活動内容に対して自発的・主体的関わりを起こすことが大切となる。もちろん、活動そのものは保育者による深い子ども理解によって、現在興味関心を持っていることを中心に、育てて欲しい姿をねらいとした指導案によって成り立っている。しかし、そのねらいを十分に汲み取った形で、活動に深い関わりを示すかどうかは“導入”にかかっていると言える。

そこで、この導入に絵本を活用することで、活動におけるねらいを想像することが容易となる。さらには、子ども達が積み上げている自らの経験を呼び起こしたり、呼び起こした経験とこれからの活動をつなぎ合わせたりすることを援助する手段となる。

(2) 昼食前の時間

子ども達にとって給食やお弁当はとても楽しみなものであり、大切な食育の場でもある。楽しい時間だからこそ、待ち遠しいものでもある。しかし、集団生活の場としてある保育現場では、皆で一斉にい

ただきますをし、食べ始めることが通常の流れとして存在する。そのため、食べ始める準備を終える早さには個人差が生じる。

そこで子ども達にとって最も苦痛な時間となる“待つ”間に、保育者による絵本の読み聞かせが行われる。これから始まる楽しい時間を迎えるにあたり、“待つ”という苦痛な時間を過ごすことなく、食事を行うことができることも、絵本の活用の大切な役目となっている。

(3) お昼寝前のお楽しみ

保育所や幼稚園での預かり保育では、昼食後も保育が継続される。そのため、子ども達の健やかな成長に大切な午睡が実施される。午睡における個人差を配慮しながら進めていく必要があるが、安心して休息を取る上で絵本が活用される。

午睡とは、心おだやかに安心した心持ちによって、成長に大切な休息となり得る。そのためにも、絵本の読み聞かせを受けることで、子ども達の心が静かでおだやかなものとなる絵本の選択が大切となる。おだやかなストーリー展開と心休まる保育者の声によって、午睡の質が高まることが期待される。

(4) おやつ準備を待つ間に

午睡が終わると、保育現場での一日も終盤に差し掛かる。ここで子ども達が迎える時間は、これも楽しみな“おやつ”の時間である。子ども達にとっておやつも大切なエネルギー補給の場ではあるが、“好き嫌い”という食育の視点では避けて通ることのできない大きな壁が存在することが少ない。保育においてもおやつは“楽しく食べて欲しい”という願いが大きい時間となる。

上述したように、おやつ時間はほとんどの場合、午睡直後に設定されている。午睡からの目覚めからおやつを食べるまでの間には、子ども達が行うことがたくさんある。午睡から目覚めるとまず排泄

を行う。そして、午睡時に着ていたものを着替える。その後ようやくおやつ準備に取り掛かることとなる。まだ眠たい目をこすりながら、また眠気からなかなか目覚められず、ぼーとした時間を過ごす場合もある。そのためにおやつ準備が終了するタイミングには、これまでの内容で最も個人差が出やすい。言い換えれば、一斉に食べ始めるために待つという時間が最も長くなる可能性があるタイミングである。

そこで、お友達を待つ間に絵本が活用されるのである。楽しい読み聞かせを受けることで、待つという時間をあまり意識することなく過ごすことができる。楽しい時間を楽しい気持ちで迎えることで、おやつ時間もまた子ども達の健やかな成長を促すものとなる。

(5) おかえりの会の前のお楽しみ

一日の活動の締めくくりとなるおかえりの会は、ただ単に一日の終わりを示すものではない。一日の終わりは新しい一日の始まりとも言える。楽しく終えた一日は、新しい一日に対しての期待感の高まりを生み出す。その期待感から、子ども達の自発的・主体的活動が促される。

そのような意味を持つおかえりの会だからこそ、楽しくおだやかな安心感を生み出すようにしなければならない。そこで、おかえりの会の前のお楽しみとして、絵本の活用がある。お話に対してのめり込むほどの期待感は、「あ～、楽しかった!」という満足感を生み出し、その満足感が新しい一日への期待感となる。

(6) 延長保育時の待っている時間

昨今、通常保育時間内でのお迎えが難しい就労の様子から、延長保育を利用している保護者が多い。そのため、子ども達の降園時間も各家庭のニーズによって幅が広い。それは言い換えると、閉園時間ま

で子ども達が残ることもしばしばあるということになる。残っているお友達がどんどん減ってくる状況は、子ども達にとって嬉しい時間であるはずがない。不安や寂しいという気持ちを押し殺している子どももいるであろう。

そこで、その不安を少しでも軽減し、楽しい時間を過ごしながらか保護者のお迎えを待つために、絵本が活用される。絵本に引き込まれ集中している時間は、想像の世界に没頭していることで楽しい時間となり得る。

これまでの保育現場における六つの活用状況を示してきたが、絵本の読み聞かせは待っている時間に活用されることが多いことに気付く。しかし、絵本の読み聞かせの目的は、待っている時間のためだけに行われるのではない。これは個人差によって生じている“行動に遅れが生じている子ども達”に対しても、大変意味のあるものとなっている。集団生活を送る上で、全体の流れに沿って行動するということはとても大切な社会性である。そこに子ども自ら気付き、自らの力で自身の行動を促す後押しとなるのが、絵本の読み聞かせである。まだ準備のできていない子どもは、読み聞かせを受けたいという願望により、早く準備を終わらせようと自らを掻き立てる。保育場面における絵本の読み聞かせには、このような二次的効果も存在する。

4. 保育者養成における絵本の読み聞かせの重要性

1) 現場における絵本活用場面の多さからくる重要性

保育現場において絵本の読み聞かせを活用する場面が多いことから、保育者養成においてもこの内容に対する理解や習得しなければならない技術も多く存在する。ここでは、保育者養成の視点において絵本の読み聞かせの重要性を捉えていき、その詳細に

対して見ていく。

(1) 場面が多いが故に知っておかなければならない基礎要綱

上述したように、保育現場における絵本の読み聞かせを行う場面はとて多く、場面ごとに配慮しなければならない点も多様である。そのためにも、まず絵本の読み聞かせにおいて、配慮しなければならない基礎要綱も存在する。ここでは読み聞かせにおける基本要綱について考える。

i. 開きを確認する

絵本には、右開きと左開きが存在する。そのため、読み聞かせをする上では当然持ち手も変わってくるということになる。右開きの絵本は左手で、左開きの絵本は右手で持つことが基本となる。絵本の見開きの中心にある折れ目を持ち、しっかり開いた状態を保つことが大切である。絵本は見開き一面によってその世界観を表している。子ども達は読み聞かせを受けている間、その見開き一面を集中してみている。読み手がページをめくるために、一面を手が横切るということは、表現されている世界観を邪魔しているということになる。世界観を崩さないよう邪魔を最小限に抑えるためにも、持ち手も気をつけなければならない。

ii. 全員がしっかりと絵本を見えるよう配慮する

絵本の読み聞かせにおいて最も注意しなければならない点は、子ども達が見る一面と読み手がみる一面が同じという点である。紙芝居のように絵の裏に文字が書かれている場合、気にせずに済む点であるが、同じ一面を見ることが、読み手の頭や体によって死角を作ってしまうことを忘れてはならない。また、子ども達が座る位置によっては、他の子どもによって見えない状況を作り出してしまふ。全員の子供達が遮られることなく、絵本を見ることができるよう配慮することで、最後まで集中力が途切れることを防ぐことにつながる。

2) 絵本理解の重要性とその方法

(1) 絵本理解の重要性

絵本を読み聞かせるために知っておかなければならない基礎要綱について見てきたが、これらの基礎要綱と同様に重要となるのが、絵本選びとなる。どのような絵本を読むのかによって、子ども達の受け取り方、差し当たっては楽しさも全く違うものとなる。絵本選びの重要性はわかったのであるが、どうすることでよりの確で子ども達にとって楽しい絵本を選ぶことができるのであろうか。そこには“絵本理解”の深まりに答えが見出せる。

理解が十分に深まっている絵本をたくさん持っているということは、場面・発達段階の適性・子ども達の興味関心などの絵本選びにとって重要な要素を補うことができ、かつ幅広い選択肢を持つこととなる。今福(2015)において、絵本の読み聞かせの意義を次の五つの点で示している。1. 絵本そのものに親しむ 2. 想像力を豊かにする 3. 言葉の楽しさ・美しさを感じる 4. 共有体験を通じて感性を磨く 5. 生活と結びつける この五つの点を考慮した絵本の読み聞かせを展開するためには、絵本選びにおいていかにその絵本を理解しているかが重要となる。

(2) 絵本理解の方法

絵本理解の重要性は上述した通りであるが、理解を深めるためにあげられる一つの方法がある。もちろん数多くの絵本と出会い、読み深めることで理解度は増すかもしれない。しかし、その理解度も漠然としたものではなく、エビデンスとしてはっきりと提示できるものでなくてはならない。そこで有効となるのが、「絵本カード」の作成となる。絵本カードとは、一冊の絵本をまとめ、書き残したカードである。カードには以下の内容を残すことで、絵本の情報とさらに絵本の理解がしっかりと残ることとなる。

i. タイトル

ii. サマリー (概要)

iii. 出版社

iv. 出版年

以上の内容を書き示したカードを絵本ごとに作成し、カードはしっかりとファイリングしておく。絵本を読み終えたのちにサマライズするためには、絵本をしっかりと理解することが必要となる。さらにサマリーをカードへ書き残すことでその印象もより深まりつつ、内容における整合性が高まることが期待できる。また、絵本についてカテゴリーを作成し、カードごとにカテゴリー別に分類しておくことで、理解度の高まりと実際の絵本選びに大いに役立つことができる。カテゴリーについては、自らの考えの基で設定できるが、一例としてここに提示する。

i. 人間関係の大切さ

ii. 心の成長

iii. 想像力の高まり

iv. 考える力

v. 非現実の世界観

vi. 探究心の追求

vii. 環境との関わり

viii. 楽しさへの探求

以上のような形でカテゴライズすると、実際の絵本選びが容易となり、また子ども達にとって適切な絵本を選ぶことができると言える。

3) 読み聞かせの異なる手法とその混乱

実際に高い絵本理解の基で選ばれた絵本の読み聞かせは、子ども達への興味関心にも高い整合性が見られることとなる。しかし、読み聞かせにはさらに大切な要素が残っている。それは、読み手の表現力である。絵本に対する高い理解があるからといって、絵本の読み聞かせにおける表現に結びつくとは限らない。そのため、絵本を読み込みながら自らの表現を高める必要がある。これは読み聞かせの練習という形で表されるであろう。

(1) 様々な観点からくる捉え方の多様さ

読み聞かせにおける表現について、その重要性を上記したが、実際にはその表現方法は絵本の読み聞かせそのものの捉え方によって多様さを極めている。最も中心にある考え方としては、「絵本は楽しいもの」という点である。しかし、「楽しいもの」だからこそ、その表現方法への捉え方が違ってくる。

絵本そのものが楽しいものであることから、読み聞かせそのものが楽しいものとして捉えられ、一つのエンターテインメント的な解釈の下、豊かな表現を用いた「演じ分け」という表現方法がある。そして、絵本そのものが楽しいものであることから、読み手による不必要な表現を用いることなく、絵本の魅力を淡々と伝える「統制」という表現方法も存在する。

実際にこの二つの表現方法の存在は、養成段階から読み聞かせを学ぶ学生にも混乱を生じさせている。さらには、保育現場においても表現方法の違いが存在しており、その違いの解釈もまた様々となっている。果たして、絵本の読み聞かせにおける表現方法の違いには、どのような概念と予想される効果、そして子ども達への影響があるのだろうか。

5. 絵本の読み聞かせ時の演じ分け

1) 大げさな演じ分けと演じ分けない統制

保育者養成における絵本および絵本の読み聞かせの重要性について述べてきたが、読み聞かせの手法にはそれぞれに強い思いが存在している。そのことにより、保育者を目指す者にとっては混乱の中において、まさに右往左往するがごとく迷いが生じていると言える。そこで、実際に読み聞かせにおける異なる手法において、どのような違いがあるのか考える必要がある。

(1) 大げさな演じ分けの概念とその予想される効果

絵本の読み聞かせにおける大げさな演じ分けとは、絵本の中で展開される物語を舞台演劇や映画のように、ナレーション・登場人物・時に効果音にいたるまで、読み手によって演じ分けられるということである。全ての役割を読み手によって賄われ、登場人物ごとに声色を変えることで演じ分けを行う。ナレーションにおいても、読み方を工夫しながら他のどの役割とも違う演じ分けを行い、読み聞かせを進めていく方法である。

大げさな演じ分けとは一体どのような意図によって行われるのであろうか。大げさな演じ分けとは、読み手による絵本のプロデュースをすることだと考える。読み手による絵本の解釈によって、登場人物ごとのイメージを構成し、そのイメージにあった声色を駆使し、その役になりきる形で表現する。まさに、一冊の絵本がエンターテイメントのごとく、子ども達の目の前に現れ、楽しい世界が繰り広げられていくこととなる。

そのように読み手による絵本の解釈、子ども達へ絵本を提供するにあたって緻密に計算されたプロデュースによって展開されるエンターテイメントは、読み手によって作り出されたイメージと子ども達の頭の中で展開されるイメージがぶつかり合いながらさらに大きく変化することを目的としている。大げさな演じ分けは絵本が本来持っている世界観や影響を、さらに大きく広げながら子ども達にとって楽しい時間を提供するエンターテイメントの一つと言える。

(2) 演じ分けない統制の概念とその予想される効果

絵本の読み聞かせにおける演じ分けない統制とは、絵本によって作られる世界を忠実に子ども達へ届けることを目的とした方法だと言える。読み手に

よる演じ分けがなく、絵本の持つ世界観が読み手の解釈などですら存在することなく伝えられていくということになる。登場人物による違いも極力抑えられ、声色の変化もなくただ読み手の持つ声色によって淡々と表現されることが最大の目的と言える。もちろん、読み手による絵本理解はされることとなるであろうが、それが読み聞かせの表現において生かされるということはないと解釈される。

演じ分けのない統制とは一体どのような意図によって行われるのか。演じ分けない統制とは、読み手の個性による解釈や表現を全く受け付けない方法である。そのため、外部からの個人的情報を一切含めずに絵本の世界観を子ども達へ伝えることが大切となる。読み手によって与えられた情報から作られた“色眼鏡”のようなフィルターを通して、絵本の世界観に触れることがない。

演じ分けない統制方法による効果とは、やはり絵本の持つ世界観の純粋な伝達ということになる。上述したように、第3者による個人的な主観による情報が含まれることがないことによって、本来絵本の持つ“絵”や“言葉”による世界観を子ども達がどう受け取り、それをどうイメージし、どう楽しむかという、やりとりが予想される。そのため、子ども達の持つ想像力が絵本の世界観を楽しむためには必要不可欠な要素となるため、自然とその力が鍛えられることとなる。

2) 先行研究1から見る二つの読み聞かせ方法における子どもへの影響

絵本の読み聞かせにおける二つの方法について上記してきたが、実際に「大げさな演じ分け」と「演じ分けない統制」において、どのような差が見られるのであろうか。物語理解という視点において、二つの方法の持つ特徴とそこから見出される違いについて見ていくこととする。

まず、一つ目の先行研究は、松村敦ほか(2015)

による「絵本の読み聞かせ時の演じ分けが子どもの物語理解と物語の印象に与える影響」である。この先行研究では、読み聞かせ時における①物語理解と②物語の印象の2点に着目し、大げさな演じ分けと演じ分けない統制が示す違いの受け取り方について研究している。

方法として、まず実験概要は実験参加者である5歳児と6歳児の合わせて19名に対し、演じ分け群と統制群に分けて行っている。グループ分けには、言語コミュニケーション発達の差異がないよう、事前にLCスケールの「手ごたえ課題」を実施した結果によって行われている。

実験環境は、図書館個室もしくは保育所内において実施した。机の上のスピーカーとその前に座る実験実施者に対面する形で幼児が座っていた。使用した絵本は長谷川摂子作・ふりやなな画「めっきらもつきらどおんどん」（福音館書店）を使用した。

実際の読み聞かせにはあらかじめ録音した2種類の音声を使用している。演じ分けない統制用の録音では、事前に公共図書館員によって見本を見せてもらい、忠実に再現する形で録音されている。大げさな演じ分け群用の録音では次の条件を満たすように読み、大げさな印象を与えるものとしている。

- i. 登場人物それぞれで声の高さを大きく変えて読む
- ii. 絵本の最初から最後まで同じ登場人物の声は同じように読む
- iii. 喜怒哀楽が表現された場面で感情がはっきりわかるように読む
- iv. 歌や情景を表す擬音語などを表情豊かに読む

理解度テストでは、「全員で遊んだあと何をしましたか?」のように物語に出てくる事象について6項目と、「おもちゃを食べたとき、かんとくんはどう思いましたか?」のような登場人物の心情について5項目を設定している。なお、心情を問う項目においては、Aうれしい気持の顔 Bかなしい気持の顔

Cおこっている気持の顔 Dすましている気持の顔 Eなんにもしていないのにふつうの顔 の表情図を準備していた。

評価では、適切回答2点・正答とみなしうる回答1点・誤答0点とし、合計22点満点で行なっている。

調査の結果では、各軍の平均点と標準偏差においてt検定を行なっている。その結果、全体と事象項目では有意な差は見られていないが、心情項目において平均点の差に有意傾向が示されていた。

この研究の結果から、「絵本の読み聞かせ時の演じ分けが子どもの物語理解と物語の印象に与える影響」では、大げさな演じ分けと演じ分けない統制における物語理解度に有意な差は生じないことがわかった。しかし、登場人物の心情を問う項目においては演じ分けない統制に良い傾向が見られている。このことから、大げさな演じ分けは読み聞かせを受ける子ども達の登場人物の心情理解において、影響を与えるとともにそれはある種の偏りを生じさせていると言える。

3) 先行研究2から見る二つの読み聞かせ方法における子どもへの影響

二つ目の先行研究は、齋藤有（2015）による「幼児期の絵本の読み聞かせ場面における大人の関わりに関する研究」において行われた、「朗読の情緒的な質が物語理解に与える影響」である。

まず方法として、対象を幼稚園・保育所に通う年長児54名を対象に実施している。グループ分けとして、大げさな演じ分け群と演じ分けない統制群は上述研究と同じであるが、さらにそれぞれのグループを子ども自身によるキー押しの操作によって物語を進める群とキー押し操作なしの自動読み聞かせ群に分けての調査である。録音音声は女性によって行われ、それぞれの読み聞かせは5分20秒前後とほぼ同じとしている。さらに大げさな演じ分けにおける録音では、①感情がこもっている②声に高低（抑揚）

があるの2点による差異を強調する形を取っていた。絵に関してはパソコンにスキャン画像として取り込み、読み聞かせの進度に合わせて絵が変わるようにしている。キー押しなしの場合は、自動スライドとしていた。

理解度テストでは、物語内で生じた事実を尋ねる設問4項目（事象）、登場人物の心情を尋ねる設問4項目（心情）、計8項目としている。

評価では、事象設問において正誤によって1または0点とし、心情設問においては文脈的に正しいが、正答とは質的に異なるものを1点とする2点満点としている。

調査結果では、事象設問に対しては読み聞かせの2方法とキー押し操作の2要因分散分析を行なっている。心情設問においては、事象設問分析項目プラス心情種類を加えた3要因反復分散分析を行っている。なお、心情種類とは被験者内要因としている。その結果、事象設問においてはキー押しの有無に関係なく、大げさ読み聞かせ郡に若干の有意な結果が見られたが、その差が小さいことから読み聞かせ2方法では、共に物語理解は高いと言える。しかし、心情設問における結果は、大げさな演じ分け郡における心情理解の高さを示すものとなっていた。

この研究結果からは、「朗読の情緒的質が物語理解に与える影響」として、物語理解における読み聞かせ方法の違いの差は見られなくなった。しかし、心情理解においてはその差が現れ、大げさな演じ分けにおいてより高い理解が示されるという結果となった。

4) 考察

読み聞かせにおける大げさな演じ分けと演じ分けない統制には、子ども達において何らかの影響が考えられる。その両者に存在する違いは様々な点において影響力を持ち、読み聞かせという学びであり楽しさにおける場としての影響があることがわかっ

た。さらにその差は登場人物の心情理解において、顕著に現れると考える。しかし、先行研究による結果はそれぞれが全く反対のものを示していた。ここから考えられることは、読み聞かせによる大げさな演じ分けは子どもの中で働く心情理解を助ける役割もあるが、状況によっては混乱を起こす要因にもなり得るということである。言い換えると、読み手の表現によって受け取り方が大きく変わってしまい、さらに絵の示す視覚情報もプラスされることで理解度が増幅もするが、混乱を招くことで理解度が減少するということになると言える。このことから、読み聞かせによる2方法はそれぞれに意味を持ち、子ども達への影響も持ち合わせているが、その影響は読み手の絵本理解によって大きく左右されるということとなる。

6. まとめ

絵本の読み聞かせにおける子ども達への影響とは、視点が違うことでその様子や影響からくる学び、成長発達に相違が生じることがわかった。幼児教育現場における絵本の重要性や、読み聞かせの活用頻度の高さからも、読み手の読み聞かせに対する理解力、さらには絵本に対する理解力が重要となる。このことから一冊の絵本の持つ力とは一つではないということになる。言い換えれば、読み手さらには読み聞かせを受ける子ども達の力によって、その3者による相互作用は無数のものとなる。

これまでの疑問であった「大げさな演じ分けと演じ分けない統制」に存在する違いには、子ども達に対する確かな影響力が存在することがわかった。しかし、この違いとは、保育者の資質として大切な“絵本理解”によって大きく左右することがわかった。絵本理解とは、確かな正解があるわけではないが、その一冊一冊に込められている子ども達への願いや確かな思いを理解し、存分に表現するという読み手

の役割を全うすることが大切である。

今回は絵本の読み聞かせにおける「大げさな演じ分けと演じ分けない統制」という点で、心情理解における影響という形で考察を進めてきた。さらには先行研究の結果を考察することで見えてきたものについて述べてきた。しかし、この二つの読み聞かせ方法には、視点を変えることでまた確かな違いが存

在すると考える。それは、二つの読み聞かせ時における想像力に対する影響である。二つの読み聞かせ方法は、全く違ったアプローチの仕方にも関わらず、その中心となる目的は、“子ども達の想像力”である。この点に関しても課題とし、進めていくことが予想される。

参考文献・引用文献

- 1) 今福謙・谷原舞「読み聞かせに関する考察」大阪信愛女学院短期大学紀要第49集. p.7-13 2015
- 2) 厚生労働省「保育所保育指針」平成29年3月31日
- 3) 齋藤有「幼児期の絵本の読み聞かせ場面における大人の関わりに関する研究—幼児の自発的な学びを促す側面への着目—」風間書房. 2015
- 4) 玉瀬友美「『保育』の教育における読み聞かせ経験—その教育心理学的研究—」風間書房. 2012
- 5) 浜崎隆司・黒田みゆき「絵本の読み聞かせがその後の人生に及ぼす影響—テキストマイニング法を用いて—」鳴門教育大学研究紀要第32巻. p.86-92 2017
- 6) 正置友子「保育の中の絵本」かがわ出版. 2015
- 7) 松村敦・森田花・宇陀則彦「絵本の読み聞かせ時の演じ分けが子どもの物語理解と物語の印象に与える影響」日本教育工学会論文誌. p.125-128 2015
- 8) 森慶子「『絵本の読み聞かせ』の効果の脳科学的分析—NIRSによる黙読時、音読時との比較・分析—」読書科学第56巻. p.89-100 2015